

**第 15 回エコエリアやまがた推進コンクール
最優秀賞（山形県知事賞）**

※掲載している情報は令和 2 年度時点のものです。

名 称	農地所有適格法人 有限会社 山形川西産直センター																																
所在地	川西町																																
応募タイトル	米生産と和牛繁殖による‘資源循環型農業’の取組み																																
<p>(1)オーガニック・エコ農業の取組み開始年</p> <p>S60 年代：川西町土づくり省農薬栽培者会発足 H7 年 8 月：(有) 山形川西産直センター設立 H27 年度：(有) 山形川西産直センター環境保全型農業推進川西部会、米沢部会、白鷹部会を設立 (各部会とも同年度より環境保全型農業直接支払交付金事業活用)</p> <p>(2)動機</p> <p>山形川西産直センターは、基幹作物である米と全国ブランドである「米沢牛」の生産を中心としている川西町において、水稻の生産および契約農家からの集荷・販売と和牛繁殖の複合経営を行っている。</p> <p>減農薬栽培を始めたきっかけは、昭和 50 年代、父である先代社長が生協組織を通じて消費者のニーズに直接触れたこと。当時、消費者の食の安全に対する要望が増え始めていて、少しでも農薬を減らしたい思いから「省農薬」栽培を取組むグループを結成し、農薬の空中散布を行わず、農薬の使用を極力減らして、肥料は有機質肥料を利用するという農法を実施した。</p> <p>生産した米は、自主流通米制度を利用して、消費地から生産者を指定した販売で開始し、最終消費者を意識した販売を目指した。安全性を売る米農家として、特別栽培と共に無農薬栽培の技術確立も始動させ、融雪湛水や有機物施用による農法を確立してきた。</p> <p>現在は減農薬栽培を中心に、平成 25 年度から始めた和牛繁殖部門からの畜産排泄物を有機資源として活用し、環境に配慮した持続性の高い‘資源循環型農業’に取り組んでいる。牛糞を堆肥にし、田んぼに入れて豊かな土をつくり、田んぼの中の生きものを増やす。生きものも土を豊かにしてくれる一要因と考えている。農薬を減らした安全安心なお米をつくることで豊かな自然をつくり、私たちが末永く健康に生き続けることができる環境をつくることにつながると考え、自然と人間の共存を理念に環境保全に取り組んでいる。</p> <p>(3)経営の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 水稻生産部門 <table border="0"> <tr> <td>自社生産</td> <td>25.5ha</td> <td>(うちオーガニック・エコ農業</td> <td>17.4ha)</td> </tr> <tr> <td>契約農家</td> <td>43 名</td> <td>(栽培型：有機栽培、特別栽培、慣行栽培)</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>(うちオーガニック・エコ農業</td> <td>98.2a)</td> </tr> </table> ・ 和牛繁殖部門 <table border="0"> <tr> <td>繁殖牛</td> <td>102 頭</td> </tr> </table> <p>2. 取組内容</p> <p>(1)土づくりのための取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料及び自家産堆肥をほ場に散布 ・ 年 1 回堆肥成分分析および土壌診断実施 <p>(2)地球温暖化抑止や生物多様性保全等の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (有)山形川西産直センター環境保全型農業推進川西部会の取組み (R1 年度実績) <table border="1"> <thead> <tr> <th>取組内容</th> <th>冬季湛水管理</th> <th>有機農業</th> <th>堆肥の施用</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>取組面積 (a)</td> <td align="center">748</td> <td align="center">98</td> <td align="center">1,234</td> <td align="center">2,080</td> </tr> <tr> <td>取組人数 (人)</td> <td align="center">5</td> <td align="center">1</td> <td align="center">2</td> <td align="center">8</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・ 田んぼの生きもの調査の実施 <p>「生きものを育むお米づくり」を目標とし、そのために生息状況を把握し、生態系を確認する為の調査活動を行っている。(農)山形おきたま産直センターの生きもの調査インストラクタ</p>					自社生産	25.5ha	(うちオーガニック・エコ農業	17.4ha)	契約農家	43 名	(栽培型：有機栽培、特別栽培、慣行栽培)				(うちオーガニック・エコ農業	98.2a)	繁殖牛	102 頭	取組内容	冬季湛水管理	有機農業	堆肥の施用	合計	取組面積 (a)	748	98	1,234	2,080	取組人数 (人)	5	1	2	8
自社生産	25.5ha	(うちオーガニック・エコ農業	17.4ha)																														
契約農家	43 名	(栽培型：有機栽培、特別栽培、慣行栽培)																															
		(うちオーガニック・エコ農業	98.2a)																														
繁殖牛	102 頭																																
取組内容	冬季湛水管理	有機農業	堆肥の施用	合計																													
取組面積 (a)	748	98	1,234	2,080																													
取組人数 (人)	5	1	2	8																													

一の指導のもと各地区生産者グループでの調査および生産者個人調査を毎年実施。

(3) 効率的な生産に向けた取組み

- ・かわにし有機農業推進協議会（H30 設立）に、準備段階から関わり、地域内外の関係者との連携を進めている。
- ・クボタスマートアグリシステムの利用によりほ場や作業の進捗管理等を効率的に行っている。
- ・スマートフォン等の端末で、ほ場の環境状態や生育状況の把握および水位・水温の自動測定や給排水の遠隔操作を行う農業アプリケーションの活用により、作業の効率化を図っている。
- ・川西町内の基盤整備事業による大区画化されたほ場の肥料や農薬散布作業にドローンを活用することにより作業の効率化を図っている。
- ・農家の高齢化や後継者不足の問題に対応すべく、農作業の業務受託（主に収穫・乾燥調製）を行っている。

(4) 地域内外で連携した安定出荷・販路拡大の取組み

- ・地域内外の契約農家（43 名）の統一した栽培技術による有機栽培米や特別栽培米を集荷することにより安定出荷に取り組んでいる。
- ・環境保全型農業への取組みに関する積極的情報発信により、平成 22 年台湾への輸出に結びついた。現在は、台湾のほか、アメリカ、香港と輸出先を拡大している。

(5) GAPの取組み

- ・2018 年 4 月 30 日 JGAP 穀物 2016 取得

(6) 地域内外の消費者等への情報伝達の取組み

- ・ホームページによる情報発信
- ・かわにし有機農業推進協議会の事業を通じて消費者等への情報伝達を行っている。
- ・お取引先様の田植え・稲刈りなどの体験を通じて、お取引先様から最終消費者へ情報発信を行っている。

(7) 人材育成活動

- ・山形県立置賜農業高等学校および山形県農林大学校と連携し、研修等を通じて後継者の育成や担い手確保を図っている。
- ・山形県農業法人協会会長（H28～、現在 2 期目）の活動を通して、優れた経営体の育成に努めている。

3. 活動の成果

(1) お取引先様の田植え・収穫作業体験



7、8 年前から取引先のうち 3 社が田植作業や収穫作業の体験に訪れています。外食チェーン等で消費者にお米を提供している会社であり、米づくりの現場を見て、実際に作業を体験し、生産者の気持ちを知りたい、という会社側の思いから始まりました。

体験した皆様からは、「農作業の苦勞を味わえた」、「おいしいお米が作られる環境を実感できた」といった感想が聞かれ、消費者にお米を提供する際に、産地や栽培方法等の情報提供を行っています。



(2)スマート農業への取組み



図 水田センサの設置状況

スマート農業の技術も積極的に取り入れています。

ドローンの利用は数年前から行っていましたが、令和2年度からは自社でドローンを購入し農薬散布等の作業を行っています。また、水田センサによる水管理にも取り組んでいます。ほ場28か所に水田センサを設置し、水位・水温の自動計測及びスマートフォンによるリアルタイムの状況把握と給排水の遠隔操作を行っています。

これらの技術により、基盤整備が進められている当地において、大区画ほ場における水管理や防除作業を省力化でき、また、生育や環境に対応した的確な栽培管理を行うことができます。さらに今後の規模拡大を見据えても効果的な技術と考えています。

また、クボタスマートアグリシステムはほ場や作業の管理の他、JGAPの実施にも活用しています。